

経帷子の秘密

岡本綺堂 原作



女の決闘

遠藤周作 原作

2009年12月12日(土) 14時開演

(開場: 13時30分開場 / 終演: 15時半頃)

枚方サンプラザ生涯学習市民センター 5階・視聴覚室

2010年 第8回定期公演のお知らせ

2010年7月10日(土)・11日(日)

一心寺シアター倶楽 演目未定

ぜひ新しい朗読GENをご覧ください。

詳細はホームページでもお知らせします。

<http://book.geocities.jp/roudokugekidangen/>

お問合せ 秋山 0742 48 - 8688

akikan@m4.kcn.ne.jp

朗読劇団
朗読 GEN 

「挨拶」

年末恒例となりました中宮サロンの公演に今年もお越し頂いて本当にありがとうございます。照明も最低限で、舞台美術もなく、小さな舞台で身近にお客様を感じつつ演じるのは、一心シシアターと違った緊張感があります。しかしお客様と息づかいを一つにしながら、舞台空間を創る楽しさは演じ手を刺激するものです。

今日のひとときが皆様にとっても私たちにとっても一期一会でありますように心より願います。

岡本綺堂は前から一度取り上げたいと思っていました。文明開化の時代の空気が、そして古き時代の人々の大切にしていた価値観、心のあり様を描いて、綺堂の文体が冴えています。捕物帳の先駆けとなった「半七捕物帳」を書いた人だけに、ミステリー仕立ての展開が面白く、またひとつ朗読GENの宝物ができました。

「女の決闘」は題を見ただけで取り上げねばと思ってしまう。たぶん「観」になればおわかりと存じます。

これから朗読GENの朗読劇を追求していきますので、何卒ご支援下さいますようお願い致します。

演出 秋山 太加

キャスト

* 経帷子の秘密

- お妻(近江屋の娘).....清水光恵
- お峰(近江屋の女房).....垣内浩子
- 由兵衛(近江屋主人).....山岡くみ子
- 文次郎(近江屋奉公人).....木村幸子
- 三之助(由兵衛弟).....福嶋左知子
- 万屋(お峰の叔父)語り.....太田淑子
- 平蔵(井戸屋若主人).....辻本由美
- 老婆 語り.....秋山太加
- 語り.....田中章恵

* 女の決闘

- 小野清子.....福嶋左知子
- 小野大吉.....田中章恵
- 塩見夫人.....山岡くみ子
- 山川夫人.....垣内浩子
- A夫人.....清水光恵
- B夫人.....木村幸子
- C夫人 教習所指導員.....太田淑子
- 子供の声.....秋山太加
- 語り.....辻本由美

スタッフ

台本構成 演出: 秋山太加
 音響: 山本弘子 / 音楽選曲: 秋山太加
 協力: 久米裕喜代、田中仁美、田中正隆
 阪本美知子

* 経帷子の秘密 あらすじ

江戸末期桜田門外の変の年。芝の田町に住む近江屋といつ質屋の女房お峰、娘のお妻、奉公人の文次郎が、前年に開かれた横浜の港見物に出かけた。その帰り、杖も持たずに七十歳の老婆が一行の後についてきた。疲れたのか、足をよろめかせる老婆を可哀想に思ったお妻は自分の駕籠に老婆を乗せてやった。

老婆は丁寧な礼を言って去って行くがその降りた後の駕籠の中には持っていた風呂敷包みが残されていて.....

作者紹介

岡本綺堂 (1872~1939)

劇作家、小説家。東京芝高輪生まれ。本名敬二。父、敬二郎は百二十石取りの商家で、のち英国公使館勤務。母、幾野は三田薩摩藩邸に武家奉公した町家の出身。明17、東京府中学に入學。幕臣の子は官途への道なく、文学者を希望。父が9世市川團十郎と親交があり、幼少から非常な芝居好きであった。当時流行の演劇改良運動に刺激され、劇作家を志すようになる。明22、中学卒業、しかし家運が傾き進学を断念。明26、中央新聞の社会部長となり劇評担当、明29、東京新聞入社。明39、東京毎日新聞に移る。

明41、一世市川左団次のために「維新前後」を執筆、明治座で上演。明44「修善寺物語」が明治座で初演、非常な好評で一躍注目を浴びる。その後左団次主演の70編余りの戯曲を発表。捕物帳の先駆けとなった「半七捕物帳」を大正5年から書き始める。昭12、帝国芸術院会員となる。

経帷子とは...
 仏式で死者を葬る際に死者に着せる着物。薄い白麻などで作り、衽や背に名号、題目、真言などを書く。
 (大辞林・三省堂)
 名号・仏や菩薩の名、阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。題目・日蓮宗の南無法蓮華經のこと。真言・仏や菩薩の教えを秘めている呪文的な語句。

近江屋: 芝・田町(現 港区芝5丁目)、井戸屋: 淀橋柏木成子町(現 新宿区西新宿1丁目)、万屋: 四谷大木戸前(現 新宿区四谷4丁目)、三河屋: 代々木町(現 渋谷区代々木) * 老婆とお峰親子が出会った場所は鈴ヶ森(現 品川区南大井町2丁目)... 海岸近くにあったお仕置き場。南の刑場として1651年設置。鈴森八幡が隣接していたのでこの呼び名がついた。ここで処刑された人は明治4年に廃止されるまで数万人~20万人とも言われる。 * 老婆の行き先・鮫洲(品川区南品川5丁目)



* 女の決闘 あらすじ

昭和30年代の終わり頃、東京近郊の団地に住む小野清子始め主婦たちの一大関心をひいたものは、自動車教習所であった。マイカーを持つことなど庶民には手の届かない夢であった時代、主婦たちは誰が先に習いに行くか興味津々。免許を取るには、銀行員の当時の初任給(大卒)より高い3万円が必要。

さて教習所へいに行ったのは.....

【昭和40年頃の物価】



作者紹介

遠藤周作 (1923~1996)

小説家。東京市巣鴨で生まれる。父は安田銀行に勤め、母は上野音楽学校ヴァイオリン科の学生だった。大15、父転勤で満州関東州、大連に移った。昭6満州事変始まる。昭8、父母離婚のため母と日本に戻る。11歳でカトリック信者となる。後年幾度も信仰を棄てようとして棄て得なかった。昭10、灘中入学、入学当時A組だったが、卒業前には最下位のD組に入れられた。この頃十返舎一九の「東海道中膝栗毛」を読み、弥次喜多を理想の人物としてそんな生活をしたいと考えていた。昭18、9つの入試に失敗、浪人生活3年の後、慶応義塾大文学部予科入学。昭20、肋膜炎のため入隊しないまま終戦。仏文科に進学後、マセイヤ評論を書き始める。昭24、卒業。昭25、戦後最初の留学生としてフランスのリヨン大に入学。昭28、健康を害して帰国。昭30、「白い人」で芥川賞受賞。昭33、「海と毒薬」で新潮社文学賞、毎日出版文化賞を受賞。昭38、町田に転居、新居を狐狸庵と命名、以後狐狸庵山人の雅号で知られる。代表作「沈黙」(谷崎賞受賞)「わたしが棄てた女」など。マセイヤ集「つたたら人間学」はベストセラーになった。

参考資料

- 遠藤周作の世界朝日出版
- 筑摩現代文学大系79「筑摩書房
- 阿川弘之「遠藤周作集」小学館
- 大系日本の歴史「小学館
- 東京時代マン「図説江戸の暮らし」

